

唱歌と現代文学（下）

若井勲夫

要旨 明治十五年に始まった唱歌教育の意義を否定し、児童は学校で習った唱歌に関心を示さず、学校の門の内だけのものに過ぎなかったと、史料も出さず説き続けた教育史学者がいた。しかし、その初期においてこそ態勢が十分に整わず、平凡で陳腐な歌もあったが、事実は、子供は唱歌に親しみ、日常の家庭や遊びの中で歌い、楽しんできた。これは明治に限らず、大正、昭和に至るまで変らぬ日本人の姿であった。このことを主として、明治以前、明治生れの文学者を中心とその作品の中からその記述を取り出し、具体的に唱歌をどのように受け入れてきたかを検証し、その意義、即ち、そのことが作者や作品の中でどのような位置づけられるかを論評してきた。その上に、唱歌の受容だけでなく、その内面にある、詩たる唱歌を理解し、作品に表現しようとする意識にも目を向けて、唱歌を詩として自覚し、自己のものとして表現する精神の過程、つまり、日本人の心の歴史をも明らかにしようとした。また、唱歌の言語表現を通して、国語表現や文体の特質、日本人の表現意識も究めた。さらに、作者が唱歌の字句を引用する時、記憶に頼って書くことが多く、誤っていることがよくあるが、その中にも国語の表現に適った誤解の仕方があることも分析した。

前稿（京都文教短期大学研究紀要三五―四〇、平成八―十三年、「唱歌と現代文学」一一六）に加え、本誌（三〇・三一・三三、同十四―十六年、「同」上中下）の全九編を通して取り上げた作者は九十名に達した。本稿では終りに、作者名を生れ年の順に索引代りに記し、また、三名以上が取り上げられている四十二の唱歌を年次別に並べた。それを唱歌教科書の発行年との相関関係を調べ、明治二十年半ばから三十年代の間に唱歌教育が充実、発展したことを裏づけた。

（キーワード）唱歌、童謡、わらべうた、歌謡、国語表現

二 補 遺（承前）

○樋口一葉（明5―明29）

明治十五年に始まった唱歌教育がようやく普及した最初の世代の子供らが、私立に対する公立学校の優位を得意ぶる対抗心については既

述した（「京都文教短大研究紀要」へ以下、紀要と略す）三六。ここで、「本家本元の唱歌だなんて威張りおる正太郎」が思わぬ生活の断片に唱歌を口ずさむ場面を補足する。美登利への淡い恋心を指摘され、「凶星をさされて、そんな事を知る物か……とくるり後を向いて」、場を繕ろおうとして、ふと「廻れ〜水車、を小音こおんに唱ひ出す」。こ

これは「風車」（明26）で、白井規矩郎『小学唱歌集』巻二に収められている。第一節が「まはれよ、まはれ、風車…」、第二節が「まはれよ、まはれ、水車…」である。この場面に「水車」を出した作者の意図は何か。「まはれよ、まはれ」という表現は微妙に揺れ動く少女への恋情を暗示するのに十分である。それはいつまでも静かに廻り続く。この原形といえる歌に『保育唱歌』（明11）所収の「風車」がある。これは「最もよく歌われたもの」（金田一春彦他『日本の唱歌』）で、第一節が「かざぐるま。風のまにまに、巡るなり。やまず 巡るも、やまず 巡るも。」で、第二節は「かざぐるまを「みづぐるま」、「風」を「水」に変える。両者の構成は同じであるが、元の短歌形式の単純な内容を、七五調三句の今様風に改めたのであろう。しかし、発想は異なり、先行の歌は動詞が終止形で、詠嘆調であり、この歌は命令形で、呼びかけになり、力強さがある。ここに、言語主体の観察的、客観的な立場から、行動的、主観的な意志を読み取ることができ。正太郎の心情を示すには、やはり「くるくるまはれ」と自己に問い、自己を奮い立たせる表現が適しているのである。

○日夏歌之介（明23—昭46）

日夏歌之介が文学史上における唱歌の位置を明確にしたことは既述した（紀要三五、本誌三〇）。この『明治大正詩史』改定増補版（昭24）を出版した後、『明治浪漫文学史』（昭26）を著した。唱歌について、前者は総論的であるが、後者は個別に作品を取り上げ論評している。「詩—浪漫派後期、唱歌的行方」で、「勇敢なる水兵」（明28）は「二十年代哀調に卓れ」、一高寮歌「春爛漫の」（明34）「ああ玉杯」（明

35）は「浪漫的ヘロウイズムの哀調に濡れてより、高級の少年に唱はれ、その詞は悉く晩翠の畑から生れたもので、唱歌出身の落合直文、佐佐木信綱などからでなかつた」と指摘する。また、「鉄道唱歌」（明33）は「平凡の故に五十三次的地名のつながりと一致して広く唱はれた」、「荒城の月」（明34）は「詞曲共に三十年代前期趣味の第一流のもので：後期の一流はつひに見られなかつた」と評価する。ここに「哀調」「平凡」という観点から唱歌の一特色を捉えていることに注意すべきである。

『明治大正詩史』は「個々の詩人についての好悪がはげしく、人生的、社会的傾向の詩に対する評価に妥当性を欠くところが少なくない」という批評がある（野田宇太郎『新潮日本文学辞典』の日夏歌之介の項）。しかし、この態度を唱歌に当てはめて、好き嫌いの感情が評価に入っていると拡大解釈してはならない。唱歌に対する肯定的な価値付けをしているのは決して日夏の個人的で評論家的な立場からではない。これは作者自身の幼いころからの体験を通じた実感に基づき、客観化、理想化されたものである。そこで、次に、この唱歌をめぐる生活の一端を反映した作品を見ていこう。

日夏の作品で初めて唱歌が表れるのは「病間日記」（昭8）（『残夜焚火録』所収、昭9）である。隣の幼稚園で「天長節」（明26）を歌っていること、「討匪行」（昭7）は「今度の戦争で出来た軍歌中の白眉で、字句も五・六ヶ所訂正すれば実に佳い軍歌になる」が、作曲は「独創」がなく、「明治の軍歌的メロディからの不見識な借物」であると断じている。この歌について「この歌詞に漲る実感と詩味は、

この曲に反映された戦場の情趣と共に強い魅力となっている」(堀内敬三『音楽五十年史』)、「短歌を思わせる叙景詩の中に、兵士の苦難がよく綴られており：昭和では珍しい軍歌」(金田一春彦他・前掲書)と高い評価を得ている。

次に、「秋の抒情詩」(昭9)で、秋は「こつそり忍びこむでくる：うつとりと自分自身の昔の夢を顧み勝ちになるもの」で、「その時、試みに昔の唱歌を稚く小声でうたつてみると：むかしのさまが：目の前にあらはれ出る」と、抒情詩の第一例にまず唱歌を挙げる。「散歩唱歌」(明34)は「無邪気」で「単調悠暢な明治的メロデー」で、「なつかしい色彩と淋しきものの音にひたつた時分が痛切に想ひだされ、「幼く死んだ人々、過ぎ去つた清純な景色などが：そそ走つてゆく」と回想する。なお、この歌詞で「秋空晴れて日は高し」の「高し」を「たかく」と連用形(中止形)にしているが、むしろこの方が動態的、躍動的で、理に適った誤用というべきである。「紀元節」(明21)は「歌の色合と曲のひびきとが不思議に一致して、昔なつかしい明治の旋律を以て人に迫り、「世は秋であるのに：ほのあたたかい紀元節のうれしい休日を思ひ出され」と、「幸福な少年時代」を懐しむ。ただ、唱歌といっても抒情的でなく、「理にこはばり」、余情がないものは「連想」もなく、「胸の中で映像を結ぶまでに至らない」として、次の歌を挙げています。「環」(明20)「大和撫子」(明14)「皇御国」(明16)「五常の松」(明14)「進め矢玉」(明28)。それに対して、「深いおもひ出の数数を持ち：秋の夜、秋の天地の寥廓たるもの寂びたけはひが：沁み込んである」歌として次の歌を列挙す

る。「勇敢なる水兵」(明28)「坂元少佐」(明27、「坂本」とあるのは誤り)「軍艦行進曲」(明30)「螢の光」(明14)「孝女白菊の歌」(明22)「荒城の月」(明34)「行けども」(明24)「仰げば尊し」(明17)「才女」(明17)「庭の千草」(明17、原文には「白ぎく」とあるが、原題「菊」、別題「白菊」の、この歌であろう)「霞か雲か」(明16)「白蓮白菊」(明17)「箱根八里」(明34)「寄宿舎の古釣瓶」(明34)「喇叭の響」(明27)「讚美歌」(明36)。これを通覧すると、日夏は静かな哀調と明るい活気のある歌を好んだことがわかる。そして、「唱歌を口吟みながら遊んでゐたその時その場所と、その情趣とが目にかぶ：その頃の喜怒哀楽がそのまま、景色とともにはつきり魅惑的の力づよさで感ぜられる」という。「その時、その場所、その情趣」に結びつく風景は即ち「原風景」といわれるものであり、(岩田慶治『日本人の原風景』)、これと唱歌との深い関わりを日夏は初めて指摘した。

この日夏の心情は生得的な感性によるものであろう。「落日を漁る少年」(昭22)で、「小学生の頃は―学校はいやでならなかつた」と冒頭に記したが、「唱歌はうたつてあるうちに、空想が限りなくわいて出て、広い二階の唱歌室から遠望すると、遠く恵那山脈が見える：何故となく涙が沸いて出てつい現実のわれを忘れてしまふ」ほどで、早くも繊細で鋭敏な詩人の才覚を見せていた。ところが「唱歌は大好きであつたが、唱歌の点は決してよくはなかつた」と付け加える。歌唱力ではなく、唱歌の抒情性に引かれていたのである。

「竹枝町巷談」(昭30)は「直江光比古之心情及行状序巻」という副題で、信州飯田町(現、飯田市)での小中学生時代を振り返った自伝

的小説である。文体は文語体で、樋口一葉の「たけくらべ」を意識して書かれているといわれ、「竹枝」は「たけえだ」とも読め、そのことを響かせているのではないか。この作品の文学的意図は、序詩として少年の春を惜しむ白居易の漢詩、序歌として「古里の愛宕社神寂びてしづもりませり秋風吹けば」(『歌集病艸子』昭10)を掲げていることよって、少年の精神的な成長を描く教養小説をめざしていることがわかる。この作品は長編で、当然、唱歌の場面が多く出てくる。そこで、まず唱歌をめぐる生活や思いが表れている部分を、ついで、個々の唱歌を歌う場面について取り上げ、考察していく。

「電気ッちふものが初めて点いたとて：大点灯の下、街の子唱歌うたひて更くるまでさわぎぬ」と、当時の少年の興奮した喜びが唱歌によって爆発した様子を描く。小学校に入ったころ「意地められて一泣きしたあとでも、講堂で唱歌習ひつゝ、松川の流のさきの、碧く黄なる鼎松尾の景色見てあれば、小胸いつしか霧^はれて自つと微笑まるゝなり」と、身近で親しみのある自然を連想し、その原風景に心が慰められる。十二歳の時、友人と「唱歌軍歌など高らかに歌ひ、我とわが若き声にき、惚れて」、疲れて一寝入りした後、朝かと思ひ、「雨戸を開けて更に又唱歌する」と、まだ深夜であったという熱中ぶりである。中学校に入る前のころ、「夕風寒く立ちそむる頃まで、本読み絵を観、唱歌うたひて居たりき。夕餉果て、…奥庭の宿雪を眺め、炬燵にあたりて弟らと歌うたふは、楽しきまとひの一刻^{とき}ぞかし」と、必ずしも学校唱歌に限らないだろうが、歌うことが読書や食事などの日常生活の流れの中にあり、家族が一体となった穏やかな生活であった。唱歌は

やはり学校を出て、家庭の中、友人との付き合い、さらに深く子供の内面生活に入っているのである。

次に、歌の曲目を中心に見ていく。「渡るに易き安城の」で始まる「喇叭の響」(明27)は厳格な知識人で、よき影響を受けた祖父が食事を終えて席を立つと、「箸の楽隊」によって歌が出てくる。この歌はまた、「つい気が緩んだか、唱ふ渡るにやすきの唱歌の節に浮されたか、勢ひ余つて：進んで立ち戻らむとする」とあるように、何か元氣よく行動する時の、きっかけの文句になっている。ある夜、部屋に籠り、銀笛で唱歌を吹き鳴らすこともある。その歌曲は「喇叭の響」(明27)「紀元節」(明21)「箱根八里」(明34)「荒城の月」(明34)「散歩唱歌」(明34)の秋で、他に「煙か雲か」が挙げられている。この「煙か雲か」という歌は見当らない。これは以前に出た「霞か雲か」かもしれないが、題名と歌い出しの句を間違ふことはないだろう。既述の「坂元少佐」(明27)の歌い出しは「煙か浪か、はた雲か」で、似たような語句が並んだため記憶が混乱したのであり、この「坂元少佐」と考えてよい。作者はこの時の心情を次のように述べる。

吹けば笛の金属性のひびきの中にわが柔かき感傷溶け込みて、魂
ゆらぎ空想燃え、今の現身すずる忘れて暖き空想の思ひ、その四
肢五体を脹らましむる心地ぞする。

この抒情的で、切なく詠嘆的な深い心底を流れる若者の思いに注目すべきである。

また、「紀元節」(明21)が「仄かに／＼暖きけはひをや、に見せて
：碧空より臥雪の上かけて流るゝ頃：暖きなさけの日の光強く見する

好天もあり」と、早春のほの暖い南信濃の空気と風景に溶け込んで唱歌が歌われている。「散步唱歌」(明34)は初めて写真を現像する心の逸る時に口ずさむ。中学生になったころは、「ひとり、を求めて」二階に上り、置炬燵に入り、「豆ラムプの悒鬱なる微光の下、吹風琴とり出で、」吹き鳴らす。ここで「天の川波」とあるのは「雪夜の斥候」(明30)、「八甲田風」は「陸奥の吹雪」(明35)、「笠置の山」は「南朝五忠臣」(明11)のことで、歌い出しの句で記している。また、「赤字の歌」とは「赤十字従軍の歌」(明37)であろう。そうすると「眼に涙すずろに滲み出でつ。歌の文句の意味已上に、ふしまはしのよく腹を掻き捲る多情の思ひあらしむればなるべし」と、深い吐息の洩れる感情移入により、極点に達するのである。続いて、漢籍や文芸雑誌を読んだ後、「孝女白菊の歌」(明22)の冒頭「阿蘇の山里秋更けて」を、「声あげて」「高く」歌うが、なぜか「落花の雪に踏み迷ふ」と「太平記」の有名な道行きを「力籠めし声音を出して一笑する」。この印象の連想が何によるのか興味深い。しかし、終りの「父を待つなるをとめ」といふ三字は「何となく羞かしくや、小さく唱ふ」のであった。このように、日夏はそれぞれの年代に応じて、それぞれの唱歌をその時々自己流で歌い、内面の感受性を練り、抒情性を高めていった。詩人の精神的な成長に唱歌が深く内在し、関係し、生きてはたらいいた典型的な例といえよう。

日夏の唱歌に対する懐旧と陶冶の情は変ることなく湛えられ、戦後は世情を批判し、自己の生き方を再認するものとなった。このことにつき、以下、夜久正雄(亜細亜大学名誉教授)の「日夏歌之介『紀元

節』の唱歌と歌集『文人画風』について」(国民同胞、平成十六年三月)によつて述べる。昭和二十三年一月、文寿堂、国立書院の編集部を手伝っていた夜久は、日夏の『黒衣聖母』を豪華版で出版することになって、日夏を訪れた。その時、日夏の作った次の歌を聞き、所蔵する日夏の『文人画風』の裏表紙に記しておいた。

笠置の山出でにし唱歌うたひつ、夕庭ゆけば涙ながる、
はにやすのめぐみの波にあみしよをしぬぶとすれば心くだくる

このことを出版社の月報に先の再版の知らせを兼ねて書くことになり、改めて日夏に歌を書いてもらったが、その書き方に日夏は満足せず、もう一度二月に葉書で送ってくれた。それを夜久は『文人画風』の表紙の裏に貼り付けて、残していた。独特の万年筆による筆致で、「黄眠道人」と署名している。前者の歌は「南朝五忠臣」(明11)の第一節楠木正成のことである。この初出は「保育唱歌」(明11)、原題は「忠臣」で、「風車」と同じく雅楽の越天楽の旋律になり、広く歌われ、明治二十年代の教科書にも多く採用されている。後者の歌は「紀元節」(明21)の第二節によって詠まれている。前述の三編の作品は幼少年代の思い出を後になって記したものである。しかし、全集末収録のこの二首の和歌は敗戦直後の昭和二十二、三年、四十歳代後半に詠んだもので、その当時の作者の心境が明瞭に示されている。戦後の世の風潮、人心の変化に悲憤慷慨する気持が流れ、たぎっている。この思いが唱歌に触発され、その詩句を用いて表していることに注意せねばならない。日夏の唱歌への情念は一貫不惑に立ち、鎮まっている。この心情に拠って、日夏は一生を通じて唱歌と共に生きてきた。

往々にして詩人といえは唱歌を軽視、あるいは無視する傾向にあるが、日夏が唱歌を詩歌と同列に置いて評価した根本の態度がこれで明らかになった。

なお、日夏は「白山御殿町―明治大正文芸回顧録」(昭22)で、青年時代の文壇を顧みている。この中で、「文芸界」主宰で、東京師範学校教授であった佐々醒雪(明5―大6)が著した修辞法書の書翰文の作例を引用し、学士町(西片町十番地)のことについて「静かな事昔の通りに候…人力の外は…琴の音、未だ蝦茶の昔を忘れてか、讚美歌めきし唱歌とベビースオルガン、先づこんな物に候」と記す。この「讚美歌めきし唱歌」とは、讚美歌のことか学校唱歌のことか、いずれにしろ讚美歌調即ち唱歌調の歌が聞こえてくる。この書名は記されていないが(出典を調べたが不明)、文中に明治三十五年の出版とあり、「蝦茶」とは明治三十年代の袴をはいた女学生のこと、当時の唱歌の風景の一つの場面としてここに記録しておく。

○林芙美子(明36―昭26)

林芙美子が唱歌に対して好ましい印象を持っていたことは既述した(紀要三八)。ここで改めて唱歌、童謡、また軍歌を材料にして、林の歌一般についての情熱を明らかにしよう。『放浪記』(昭5)の冒頭に「旅愁」(明40)の第二節三行を掲げ、続いて「私は宿命的に放浪者である。私は古里を持たない」と記していることは広く知られている。この「古里」という漢字表記について論及したものがある(野島秀勝「林芙美子・人と作品」『昭和文学全集』八)。それによると、「旅愁」の元の歌詞は「恋しやふるさと」と、「ふるさと」は平仮名であるの

に、林の引用は漢字である。私生児である林の本籍地は現在の鹿児島市古里町であるが、当地は出生地でも生育地でもない。「古里を持たない」という述懐は地名「古里」と二重写しであり、「不可能なへ故郷」の幻影が、悲しいイロニーの短調を響かせているとする。確かにその通りと言えよう。桜島南端の古里温泉は林の実際のふるさとではない。「放浪者」を自認し、土地の「古里」も心の安住するふるさととも、ともになかった。しかし、林は決して唱歌を排斥する気持はない。唱歌を含めて歌謡一般に地味な熱情を持ち続けた。それは諦念であり、一種の悟りでもあったろう。

さて、明治後期の洋画家、青木繁が放浪の果てに宿痾の結核のため福岡で発病し、死ぬまでを描いた「夜猿」(昭25)で、入院中の正月、廊下を通る子供らが「一月一日」(明26)を歌っているのを聞く。「思ひ出深い歌である」と、東京での生活を回想し、自殺した藤村操の「あの思ひが、今頃になつて羨しい気がした」。これは作者自身の思いでもあろう。「子供の歌ひさつて行つた、歌声にも、胸の中がうづく程であつた」。「旅愁」の身の林にも同じように胸迫るものがあつたに違いない。また、「茶色の眼」(昭25)は結婚生活に飽きた夫婦の心の通わない生活を描く。気位が高く「茶色の眼」をした妻が実家に帰った後、気の弱い夫は下宿する美術学生と酒を飲み合う。学生は「青葉の笛」(明39)を歌う。ただし、歌詞は「須磨の嵐に聞えしはこれか、青葉の笛」であるが、引用は「夜半の嵐に、うたれしはこれか」と、もっともらしく誤っている。まさかここに作者の表現的意図はないであらう。夫は「小学校時代の昔を思ひ出した。自分のある時代にも、

こんな歌があつた」と懐しがった。「敗戦の歌といふものは、何といつても、哀れに美しい：歌といふものは、思ひ出を誘ふものだ」と、戦後の世の中の現状と重ね、夫婦間の倦怠と無気力な様子を漂わせている。作者の描く唱歌の世界は虚ろで、暗さとわびしさがやはり漂っている。

林は作品の中によく自作の詩を挿入するが、同じように唱歌だけでなく、わらべうたや俗謡なども引用することが多い。パリ旅行を素材にした「屋根裏の椅子」(昭7)で、パリ人が「ギッチョン、ギッチョンの日本歌を口ずさみながら、『大変なつかしい』といった風な表情をして見せる」とある。この「日本歌」は唱歌「高い山」(明25)の元歌である俗曲「高い山」(明2)であろう。これは「ギッチョンギッチョン」というはやし言葉を添えて歌われていたもの(金田一春彦他・前掲書)である。「清貧の書」(昭6)で、「蛙が鳴くから帰らう」、「蛙の唄をうたつた：男の子」とあるのは、江戸後期以来のわらべうたのことである。また、「文学的自叙伝」(昭10)では、女学校の四年間「ほとんど陰気な図書館で暮らし、：目立たない生徒で、仲のいい友達も一人もありませんでした」という林は、唱歌室で聴いた「椿姫」(昭3)は「唱歌の判らない私にも、その言葉は心が燃える程綺麗だつた」と回想する。この歌は「姉妹」(昭23)『放浪記』第三部(昭24)にも出てくる。また、『放浪記』第一部(昭5)に「カチューシャの唄」(大3)を歌い、「ロマンチックな女」になり、「何だか子供心にも切ないものがあつた」と懐しむ。「城ヶ島の雨」(大10)は『放浪記』第一部や「瑪瑙盤」(昭8)で歌詞を引用する。終りに、『放浪

記』第一部に出てくる他の歌謡を一括して順に掲げる。「おいとこ節」(大3)「炭坑節」(昭7)「ストライキ節(東雲節)」(明33)「立山節」(明28)「子守唄」「沈鐘」(大7)「土佐節」(明22)。第二部(昭5)には「籠の鳥」(大12)が出る。

また、随筆の「秋その他」(昭8)では「山の中の小さい町中で、カジ屋の若い衆」が「都会から山を幾つも越して来て古くさくなつた」「酒は涙か溜息か」(昭6)を歌いながら蹄鉄を作っているのを見て、作者は「自分の生活が何だか味気ないものにも思はれて来る」と考えてしまう。地について「よい生活」をしている生き方が恨めしく、ふと我に振り返って省みるのである。このように、林はいろいろな分野の歌に関心を持ち、歌い、創作に取り入れた。これら多くの歌の中に唱歌もあつたのであり、作者にとつてはどの歌にも価値があつた。ことさら唱歌に限って批判するのは当たらないことである。

では、軍歌に対してどのような扱い方をしているだろうか。「軍歌」(昭25)で、酔った復員兵が歌う「軍艦行進曲」(明30)について、「客も一抹の旅愁に似たものが、みんなの心をかすめたに違ひない。すべてが、そのままに残つて、人生は、ここまで流れてしまつたのだ」と述懐する。戦争も敗戦も、また戦後の生活もすべて「旅愁」であつた。『放浪記』冒頭の唱歌「旅愁」はここに至るまで響いてくる。昔も今もありのままの現実であり、一筋に流れ来たつて、自己の生涯となつたのである。そこに定められた運命というものがある。「若鷺の歌(子科連の歌)」(昭18)では、軍歌は「歌へば悲しい」、それは「お互ひの胸のうちなんだ、思ひ出しますと云ふだけのもの」で、さすが、大切な

事だね」という。また、「大旅行をしたやうなもので」、「結局は、俺という人間が残ったやうなもの」である。やはり「大旅行」という捉え方をしている。戦争も放浪であって、それは作者自身の人生でもあった。そこで、「もういちど、悲しくなつてあの頃の痛さを思ひ出してみなくちやいけない」という。軍歌に触発され、戦争を経きた人間の一生を意義づけようとしている。悲しく辛い思い出は各自の胸の中にある。それは生きてきた証として大切なものである。戦いに敗れても、その苦しさを思い起し、これからもあのころと同じように生きていこうと悟る。この作品には他に、「露営の歌」（昭12）「父よあなたは強かった」（昭14）「暁に祈る」（昭15）、また「銀座カンカン娘」（昭24）「炭坑節」（昭7）も含まれている。ただ、「雨にもめげず、風にもめげず」は歌詞の一節と思われるが出典は不明である。

では、この「軍歌」の主題は何か。ただ単に回顧とか思い出を懐しむものでも、戦争批判でもない。復員兵が語る「いまも現実だろ、あの時も現実だった」という時代を認識する態度に着眼すべきである。戦中、戦後もそれぞれ独自の価値を持つ生活があり、生き方があった。国民はその時々、一途に生きて来て、今に至っている。負けたからといって、過去を否定したり、現在を呪うことはない。日本人として、国の現実の在り方を直視し、その奥にある人間性の真実を捉えようといっているのではないか。

この視点は戦時中の林の行動を理解するにも有効である。日華事変の始つた昭和十二年に南京陥落、新聞社の特派員として当地に赴き、翌年にはペン部隊として従軍、上海に行き、次いで漢口に報道記者と

して一番乗りを果たした。帰国して各地でその報告の講演をし、『戦線』を刊行した。翌十四年の『北岸部隊』では「私は兵隊が好きだ」で始る詩を書き、「民族を愛する青春に嘖きこぼれ、旗を背負つて黙々と進軍してゆくのだ」と結ぶ。雨の中、トラックの下へもぐりこんで寝ている兵隊の姿を見て、「私は胸ふたぐ切ない思ひだつた。雨の降るなかを『こゝはお国を何百里』と云ふ口笛が行く」と、「戦友」（明38）を記す。また、「空軍に、こんな堂々とした軍人を持つことは、祖国日本の悠々たるものを感じる」と称揚する。あとがきに、「兵隊さん」といわず、「兵隊」といつていたのは「堂々たる軍勢」の「素晴らしきこと」を表すためと述べる。

このような林の実際的な行動力を後になって批判する意見がある。一例を挙げれば、「彼女は、ただ、特別の行動力を発揮して、その実感を、すなおに：つづっているにすぎない」「戦後の芙美子がまず書く」と決意したのは、戦争によって運命を狂わせられた、不幸な庶民群像であった。そして、そこには、反戦の思いが強くこめられていた」とし、「その時々々の感情に忠実に疾走するところに、その独特の資質」があると主張する（磯貝英夫『新潮日本文学アルバム・林芙美子』）。これはあまりに通俗的過ぎる世間一般の判断であり、戦後日本人にありがちな生き方を言っているに過ぎない。林にとっては放浪も戦争も戦後も決して「狂わせられた」とは捉えていない。前述の通り、それぞれに懸命に身を処してきたのである。それはまた「その時々々の感情」のままというものではない。人生を放浪、旅行と諦観し、大衆観するところに根づいた人生観によるのである。

ここで、林の戦後の生きる構えを、長田泰治の論（「林芙美子の大東亜戦争観」あらたま五十、平成十二年十二月）を参考にして述べよう。「この戦ひの終りかたが、本当に終った感じには思へなかつた。…本当の平和である緑地帯のやうな、明るいものを空想する事は出来なかつた」という（「折れ芦」新潮、昭25・1）。戦争は未だ終らず、尾を引いている。平和は本物ではなく、「それらしいそぶりが柵引いて」、はかなく浮かれている。国民は敗戦の重みを感じ取っていないというのである。また、「聞いてみれば、自分だけが不幸なのぢやない…祖国を想へばこそ、無理な長い戦争にも此の人達は耐へ忍んできた」（「雨」新潮、昭和21・2）。庶民はそれぞれに戦い、耐え忍び、生きてきた。不幸であったのは「庶民群像」ばかりではない。運命が狂ったとすると、それこそが我が身の運命であったのである。さらに、「敗戦のあと、あまりもみじめに、この死者の情緒は俗化しはじめて、死んだものが馬鹿をみたのだと云つた。…喬造はかうした言葉に烈しい怒りを持つた」（「麗しき脊髄」別冊文藝春秋、昭22・6）。こう語らせる作者に「反戦の思い」という便利な用語はもともとなかった。作者は戦争も敗戦も現実であり、それを冷静に見つめて、人生を生きてきたのである。このように考えてくると、林の作品の「軍歌」と歌謡の「軍歌」はこの思想に沿って位置づけることができる。そして、それは唱歌にまで及び、林の人生の投影であったのである。

○石坂洋次郎（明33—昭61）

石坂洋次郎が唱歌をはじめ歌謡曲を作品に取り入れ、創作のモチーフとしていることは既述した（紀要三三八）。ここで、『青い山脈』（昭

22）の作品に出る歌を補足する。女学校で宿直をしている教頭のもとに妻が夕食の弁当を持って来る。もと小学校の教師であった妻は「急にオルガンを弾きたいといい出して」、「鉄道唱歌」（明33）と「荒城の月」（明34）を鳴らす。

キマリきつた曲だけしか弾けない訳ですが、それでも本人は十分に楽しいんですな。…青い月の光が窓からさし込む音楽室で、オルガンの音が響いているのは、まことにロマンチックな気分でした。私も浮かれて、つい老妻の伴奏でむかしの唱歌をうたったりいたしましてね。

唱歌（音楽）の楽しみ方はいろいろあるもので、これがごく自然な形でなされている。「人間はどんな環境の中でも楽しみを見出すことが必要」と説いているように、唱歌はどこでも歌われて、よき感化を与えてきたのである。この他、シュールベルトの「菩提樹」（明42）、西条八十の「純情二重奏」（昭14）が歌詞を付して歌う場面がある。どれもこの作風にふさわしく、向日的で明るく、伸びやかな雰囲気漂わせる。石坂作品に引用する歌はどれもこのようなささやかな幸福感が流れている。一方、前述の林芙美子の場合はその逆の不幸感がある。唱歌は明と暗それぞれの中で歌われ、親しまれてきた。だからこそいつまでも生命を保ってきたのである。

○岡 潔（明34—昭53）〈新〉

数学者として世界的な業績を挙げた岡潔は、一方、評論家として独自の人生論・宗教論・教育論を説いた。数多い一連の著作に、唱歌を題材にして日本人の生き方や情操の養い方を世人に訴えた。本稿で

は、この唱歌論ともいべき評論の内容を六項目に分類して、岡の考え方を究めていく。著書の中では同じ趣旨の繰り返しが多いので、煩を避けて、それぞれの項目ごとに出典の番号をまとめて記入するに止める。ここで、参照した著作を発行年順に記す。

①『春宵十話』（昭38）②『風蘭』（昭39・5）③『紫の火花』（昭39・6）④『春風夏雨』（昭40）⑤『月影』（昭41・4）⑥『春の草—私の生い立ち』（昭41・10）⑦『春の雲』（昭42）⑧『心の対話（林房雄と対談）』（昭43・3・29）⑨『一葉舟』（昭43・3・30）⑩『昭和への遺書 敗るるもまたよき国へ』（昭43・6）⑪『日本民族』（昭和43・12）⑫『葦牙よ萌えあがれ』（昭44・1）⑬『曙』（昭44・6）⑭『神々の花園』（昭44・10）—以上、七年間、十四冊。

(1)父から教えられた新体詩の唱歌(⑥⑦⑨⑬)

岡は子供のころ、父親から子守唄のようにして軍歌を歌って聞かされた。軍歌といっても後述するように新体詩の歴史唱歌といふべきもので、軍歌のはしりともなったものである。これは「出征する父に遠慮して、母がその席を譲ったんだらう」と後年に回想し、「今でも歌うと涙がこぼれる」ほどである。その唱歌は「一の谷熊谷直実」（明23）と「小楠公」（明23）で、竹内節編『新体詩歌』のそれぞれ第一集（明15）、第四集（明16）に収められている。作詞・作曲者は不詳である。前者の原題は「熊谷直実暁に敦盛を追ふの歌」で、歌い出しは「抑も熊谷直実は、征夷将軍頼朝公の御内に、関東一の旗頭、智勇兼備の大将と…」、後者の原題は「小楠公を詠ずるの詩」で、歌い出しは「嗚呼正成よ正成よ、公の逝去のこのかたは、黒雲四方にふさ

がりて、月日も為に光りなく…」で、それぞれ長大な詩篇を成している。なお、後者は楠正行のことを歌いながらその名も主語も出て来ず、国語らしい表現になっている。

岡はこの歌詞のいろいろな部分を断片的に引用しているが、かなり元の歌詞と異なっている。ここに一々指摘しないが、確かめて書いたのではなく、他の作家と同じく記憶によって書いたであろう。この誤解の仕方を見ていくと、記憶が長い時間の流れによって、一部分が薄れ、その前後の文脈が合うように後年の大人の解釈や合理的な判断が入り、その箇所としては意味が通じるように字句が変化、変形していつていることが分る。それにしても唱歌に関する岡の記憶力は強いものである。これについて、昭和三年生れの田辺聖子はタクシーで岡山県の蒜山高原に向ったとき、その会社が「院庄タクシー」であることから心の中で「児島高德」（大3）の唱歌を歌っていて、「小学唱歌というのはいへんなものだ。五十すぎても忘れないでおぼえているのだ」と述懐している（『女ノ幕ノ内弁当』昭59）。唱歌にはそれほど記憶に、即ち、心に残る価値があったのである。

さて、この二つの詩は『撰曲唱歌集』第二集（明23）に作曲され、明治二、三十年代の教科書に採用され、全国に普及して広く歌われた。新体詩といえば、外山正一編の『新体詩抄』（明15）より、小型で廉価な『新体詩歌』第一―五集（明15・16）の方が圧倒的に、特に青少年に迎えられた（本誌・拙稿〈中〉）。新体詩は一般に長詩型であり、また、かなりの詩が作曲され、読むだけでなく歌われることにより、岡の故郷、和歌山県の山村にまで及んだ。この二編の唱歌は軍歌

の先駆といえるが、そもそも軍歌と唱歌とは明確な区別があるのではない。軍歌は唱歌の様式によって、楽譜によって広がっていった(堀内敬三・前掲書)。これを今、仮に「唱歌的軍歌」と名づけると、その特質がはっきりする。この「唱歌的軍歌」は「措辞が粗笨で、内容も甚だ雑駁であったが、新しい歌謡文学として歓迎され」、流行していったのである(堀内敬三・同)。岡の幼少年時代の記憶の重大な基底にこの唱歌体験があった。それは父母、故郷そのものであり、内容的に成長する場であった。唱歌はただ唱歌だけがあるのではなく、その根底に家庭、学校が確固としてあり、人としての形成をなさしめるのである。

(2)連想により心情、情緒を育む唱歌(②③⑤⑥⑨⑪⑫⑬)

岡がしばしば語る少年時代の重要な思い出話がある。小学校五年生のころ、唱歌を教わった女の先生、木村ひで(高瀬正仁『評伝岡潔星の章』)は、岡を大変かわいがったが、ある時、授業時間に同級生の後について悪ふざけをした。その時、先生は岡の顔を見つめ、「お前ですか」と涙を溜めて悲しんだ。その目がどうしても忘れられない。後年、ある女性と会うことになり、その名前が「古村こむら」であった。その時、岡は瞬時にして「古村」は「こそん」と読めることから、昔の唱歌の一節「花あり月ある孤村の夕ゆふ、いづこに繋がん栗毛のわが駒」を連想し、同時に、あの時の「女の唱歌の先生」の涙の目を思い出した。岡はこの涙の目の印象、涙の目の内容の情緒が自分自身の道義をつくったと述べる。岡の説く情緒論はこの体験により形づくられ、印象や感銘は脳の後頂葉、その内容たる情緒は頭頂葉で蓄えら

れるとする。唱歌を仲立ちにして、脳の活動が説明できるのである。なお、この唱歌は「騎馬旅行」(明29)で、『新編教育唱歌集』第八集(明29)に所収、作詞・作曲者は不明である。歌い出しは「肥えたるわが馬、手なれしわが鞭、千里の旅行も、おもへばやすし」で、二行置いて、当該の句で結ぶ。唱歌のほんの短い句がこのようにしかるべき時に、しかるべき者に、一瞬にして蘇り、再生するとは唱歌に限らず、韻文の重大な特性を示すに余りある佳話である。

次に、岡が随筆集を書き始めようとしたが、標題が思いつかない。そこに人が訪ねてきて、共に庭に出てみると、風が強く吹いてきた。ここで突然、「紀元節」(明21)の歌詞を思い出し、「高千穂」の関連からか、次いで「秋風や霧島山を後にせん」の句を思いついた。これにより標題が「秋風」と決った。新しい発見と着想を求め、苦しむ時に、風によって刺激され、動かされ、唱歌の一節を自然に口ずさむ。心情や情緒のはたらかせ方の見本というべき体験である。「荒城の月」(明34)も直感的で鋭敏な印象を与え、情緒を導かせ、育む。高野山で講演した後、ひとりで林間の小道を歩いていたら、この歌を自然に口ずさんだ。「涙が急にとめどもなく流れ落ちた」。ここで、「歴史の中核を包むものはこの美しい心情の流れだと思う。…これを欠いては『同胞愛』は湧くものでない」と思い至り、「詩情」の重要性を述べる。また、敗戦直後、占領軍が日本歴史や日本語を破壊し、文部省もその線で政策を進めて、古典が読めないようにしている。しかし、「日本民族は滅びない」と確信し、この「荒城の月」第三節を引用する。これも情緒がはたらき、思考に及んだ例である。

「ゐなかの四季」（明43）は「私にとってこれ以上美しい歌はない」のであり、「うた」によって頭頂葉を育てようと思えば、国語によってこの国の濃やかな情緒を教えるのが一番よい」として、この歌詞を掲げる。唱歌は国語であり、その国語たる唱歌が情緒であるというのである。また、「白虎隊」（明38）は子供のころ、これを歌って「情緒を育ててくれた」と回顧する。音楽による情操教育ということがよくいわれるが、岡のこの体験で十分そのことを証していよう。この連想のはたらきは理論でも理窟でもなく、次のような諧謔的な例でもよい。戦後、折口信夫が「大和撫子よ、精神的な恋をせよ」と言った。これについて岡は、「至言ですが、私はこの言葉からは、次の唱歌を連想せざるをえません」として、童謡「青い眼の人形」（大10）の歌詞をあげ、「私は言葉がわからない」：あなたがたによくわかるようないい方でご説明しましょう」と話を進めていった。この当意即妙の歌の句の使い方もやはり情緒を生かした一例といえよう。

(3) 生きる姿勢、考える態度を教える唱歌 ①④⑤⑥⑦⑨⑩⑬

「四条畷」（明29）は歌うたびに岡の生きていく姿勢を正してきた。数学の難問にぶつかると必ず歌った。「そうすると電光がビリビリット背骨を走る。そうすると、よしやってやろうという気になる。：そうするとほのぼのと面白くなる」。この歌い出しは「吉野を出でて、うち向ふ、飯盛山の松風に…」であり、いざ出陣、出発して行動しよう」と決意する時にびったりである。この歌は、大学で講演するため自宅を出る前、また「悪いものを見つけて指摘するだんになると」、ふと口をついて出て、「念の異を自覚し」、「いやな心はすぐ除きすて、」

勇気が湧いてくる。これも岡によれば「頭頂葉に光がついた」ことになり、唱歌の意外な作用を示している。

「高い山」（明25）も思わぬ効果を發揮する。「日本民族はいたずらに古いものではない。心の中の山が高いのである」と考察する契機になった。また、三十歳前後にフランスに留学した時、「西洋文化が『高い山から谷底見れば、瓜や茄子の花盛り』と見えた」と、その歌詞の文言のままに、他民族に対して「のんできかるとい一手」を思いつく。唱歌が文化を考察する視点を教えるとは興味深い話である。また、さらに、「ここをやり抜く…本当に真剣になればきつとここに登って見るし、そうすればどんなことでもこう見えてしまう」。「ちっぽけな問題に誇大な名前を付けている人達の言うことなど…呑みかからざるを得ない」と、この歌は研究の態度を教え、学者の通弊を批判するまでに至る。これは天才岡潔だからこそ言えることであるが、それほどの人物にまで及ぼす唱歌の力の重さ、深さを思い知るべきである。「紀元節」（明21）では、古代から変らない情操であり、「思いついて大きく想像の羽をひろげれば、日本民族は一万年くらい前は黄河の上流に位置し」、「それから南下してシナ本土にはいろいろとするが妨げられ、山から降りてきた」と「雲にそびゆる高千穂の…」を解し、「埴安の海といえぱベルシャ湾のように思える」と、奇想天外な、独特の見解を披露する。その当否は別にして、これも直感的情緒によるのであろう。

旧制高校の寮歌も生き、考える心構えを養う。岡は「感激により理想を描く」ことを説き、それには寮歌を歌い、散歩するのがよいと

する。三高寮歌「紅萌ゆる」(明39)は三高の自由な校風を示し、「これは内無明を抑圧し、外多数の横暴に屈しないことである。学問の生命はこの意味の真の自由にある。……これは人の生涯を通じて大切なのである。だからこれが学校教育の精神」だとする。また、一高寮歌「春爛漫の」(明34)の第三節「それ濁流に魚住まず、秀麗の地に健児あり」は「日本の情緒を端的にいいあらわしている」。この歌のように、大学の研究室は「『世間を持ちこむな』ということであって……ここはだから空気が澄んでいる。ここから眺めてみると、世のさまざまの相まではわかって、そのにがりの度合はよくわからない」と述べる。寮歌はかくなる精神世界を歌い、自由と理想を求め、情緒、真情を培い、高めていくものなのである。なお、昭和三十五年、岡が文化勲章を受章した後、三高の同窓生二人と東大で会った時、気分が高揚して「愛国行進曲」(昭12)を歌ったという(高瀬正仁『評伝岡潔花の章』。これも歌の与える作用を示している)。

(4)日本人の心情、生き方を教える唱歌(⑤⑩⑬⑭)

岡は明治維新を説き、「世のにごりは頭頂葉へたまるに違いない。だから恐ろしい。今度(注、戦後)のにごりは明治維新のとは違う」と述べて、「元寇」(明25)の「四百余州を挙る、十万余騎の敵、国難ここに見る」と、歌詞を引用する。我々の生き方を唱歌によって示し、警告した。次に、学生への講義に自宅を出る時、昭憲皇太后の御歌「金剛石」(明29)を口誦んで気を引き締める。そこに日本人の生き方を説く意図もあろうが、時に「この情緒の高さから出る意識」を見つめて、この御歌が出てくるようである。また、歌謡曲「酒は涙か

溜息か」(昭6)の歌詞を引用し、「満州事変と日華事変との間にしばらく重苦しい平和の日々が続いた」ころにできたこの歌を「口誦むと、今でもそのころのふんいきが蘇って来る」と、世の中の動きを反映する歌として位置づける。そして、現在も「日本民族はまるで危機感がない」と警世の言を吐く。なお、「岸打つ波もさらさら」と、日もまだ出でぬ磯ぎはに「は」小学唱歌」と注記があり、この歌を思い出して「明治の初頭に立ったようなつもりで話をした」と述べる。厳しくもさわやかな朝まだ暗い波打ち際に一日の始まり、即ち明治の始まりを連想したのであろう。言葉を人間が語るといふより、内面にある言葉が逆人間に語りかけるのである。ただ、この詞句の出典を明らかにすることはできず、小学唱歌ではなく、岡が唱歌とともによく覚えている少年雑誌にあった詩の一節であったかもしれない。

(5)寮歌による校風の比較(⑤⑦⑧⑨⑩⑪⑬)

岡は一高へ行こうと思っていたが、入学試験が近いころになって、自分に合わない知り、三高に変えた。この学校の違いを寮歌を比べることによって論じている。この寮歌の比較的考察は特に珍しいものではないが、岡の意見をここにまとめておく。三高寮歌「紅萌ゆる」(明39)を代表とする三高は自由であり、歌詞の通り「春が来れば花を見、秋が来れば紅葉を見ていた」、「政治のようなものはずんぜん相手としないで、行きたいところへ行く、見たいものを見る」生活であった。「三高の自由は……植物の喜びである。言い換えると神代の心である」。それに対して、「一高寮歌「ああ玉杯」(明35)を代表とする一高は自治で、「動物の犇ぎ」である。五高寮歌「武夫原頭に」(明

37)は「どちらかというと一高に似て」いる。寮歌は毎年、記念祭に校内の各寮で作って発表する。従って、各校とも多くの寮歌があったわけだが、今になっても残り、歌われ続けている有名な寮歌がまさしくそれぞれの生徒に影響を与え、校風を形成してきた。生徒が寮歌を作るが、逆に、その寮歌が言葉に内在し、作用する力によって、寮生を作り、教え導くことになった。これは現在でも校歌について言えることであり、唱歌の重要な意義を如実に示している。

(6) 讚美歌にこもる生命 (④⑨)

岡がパリの大学に留学して、街を散歩していた時、どこからか讚美歌が流れてきた。それは「讚美歌」一七四(明36)で、第一節「天つ真清水流れ来て、あまねく世をぞ濡^ぬせる」を引用する。この歌は後になっても印象として残り、「冬枯れの野に大根畑を見れば、あそこに生命があるとすぐわかる」と、「生命の緑の芽」を持つ必要を説く。その時の引用がやはり同じ讚美歌の第三節の「天つ真清水受けずして…そそげいのちの真清水を」である。岡の最も言いたいことは情緒を高めることであり、それは緑の真清水であったのである。なお、小学校の国語読本の文章についても二編を取り上げ、風景の美しさを説明している(⑨⑭)。

以上の分析を通して、岡潔の生涯の根源に唱歌があり、そのことは唱歌に対して興味、関心があったという表面的で軽いものではなく、唱歌そのものが教え、育み、生かshめてきたといえるのである。ここで、ゲーテの小説に出てくる歌についての見解を引用しておく。理想郷たる「教育州」の理念は、畏敬を基盤にして宗教性と芸術が重んじ

られている。

われわれのところでは、唱歌が教養の第一段階である。他のすべてはこれに関連し、これによって仲介される。ごく単純な楽しみも教えも、われわれのところでは唱歌によって活気づけられ、心にきざみつけられる。われわれの伝える信仰や道徳でさえ、唱歌によって伝えられる。…われわれはあらゆるものの中で音楽を教育の基本に選んだ。音楽からあらゆる方面へなめらかな道が通じているのであるから。(『ヴェルヘルム・マイスターの遍歴時代』)

第二巻第一章。高橋健二編訳『ゲーテ格言集』。

この「唱歌」(原語 Gesang)は「歌」と翻訳されることが多いが、日本で言えば学校唱歌に相当するだろう。ゲーテの言は岡の場合だけでなく、わが国の唱歌教育史上においてもそのまま当てはまることである。

○井上靖(明40—平3)

井上靖の唱歌との関わりが自伝的小説にしばしば表れていることは既述した(紀要四〇)。ここで新たに、随筆「月の光」(昭44、『わが母の記』昭52)をもとに補足する。この作品は幻覚がきた母の「崩れてゆく」日常を描いたものである。幻覚の症状を起してから「おとなしく静かな何日かを過した」母は歌を声に出す。「孝女白菊の歌」(明21)と「石童丸和讃」(明22)の冒頭の二節を「口ずさみ、すぐ詰まると、『もうみんな忘れてしまった』と言う。また、「ジャガタラ文」の一節を「少し節をつけて歌うように言った」。「可哀想なことばかり覚えてる」のは、悲劇的なものの方が心の中に沁み入るからであ

る。喜びの気分は軽く遠ざかって、悲しみの心は深く沈潜する。前者の歌は若いころ「永遠に消えぬ悲しみとしてその心に刻みつけたもの」であり、後者も「愛別離苦」であり、「母の郷里へ帰りがっている気持はじゃがたらふみの筆者の持つ望郷の念の切なさ苦しさと同じ」と井上は考える。幻覚にとらわれ、痴呆に近づいても心に正しく蘇るのは唱歌であった。切なく悲しくも、しかし何か救われるような人間の真実といえよう。「いまの母の心を捉えているものはこの人生において愛別離苦だけになってしまっていると言えるかも知れない」という。人生の終末に生きる人間の最後のはなむけとして唱歌の価値が見出されるのである。

〈付〉○新見南吉（大2―昭18）

以上により明治以前、明治時代に生れた作家・評論家と唱歌との関係を管見に及ぶ範囲で九十名にわたって述べてきた。ここで、番外として、明治四十五年・大正元年の翌年生れの童話作家である新美南吉の場合を調べよう。「貧乏な少年の話」（昭17）で、家の貧乏に劣等感を持つ少年が言葉の最後まではっきりものが言えずに、力が抜けてしまう。歌を歌う時も途中で止めてしまつてわからなくなる。その例として「児島高德」（大3）を歌詞に節をつけて引用している。また、「ラムプの夜」（昭26）は「学芸会のため的一幕劇」で、生前に未発表であった。「春になつたばかりの風の夜」に、「春が来た」（明43）を静かに口ずさむ場面がある。日常の些細な一断片であるが、それこそがこの歌の日々の生活に溶け込んでいることを示す。「登っていった少年」（昭11）はやはり生前に未発表、学芸会で唱歌にするか対話劇

にするかを定める唱歌の授業風景がある。このように、僅かではあるが新美は唱歌に関心があつた。

「正坊とクロ」（昭6）はサーカスの興行で「勇敢なる水兵」（明28）のラッパが鳴り出したら、正坊と犬のクロが舞台に出ていく進発の「楽しい曲」であつた。ある時、腹痛を起したクロを元気づけるため、怪我で入院している正坊を呼んで、この歌を歌ってもらい、より仲良くなる。やがてサーカス団は解散し、クロは町の動物園に飼われる。元気をなくしたクロを励ますべく、正坊は園を訪ね、この歌を再び歌って回復させるといふ物語である。ここに元気づけ発奮させる歌の特性が表れている。なお、「手袋を買ひに」（昭18）はシューベルトの「子守唄」（明42）が流れ、母と子の愛情の温い空気を漂わせている。また、「嘘」（昭16）では、国語読本を授業中に読む風景が出てくる。宮沢賢治の場合は家庭であつた。唱歌に関心のある者は読本にも同じように心を用いている。

童話作家は童心主義を求めるあまり、往々にして、童謡ならぬ唱歌を軽視する傾向にある。しかし、新美の場合、まだ年が若く、作品もそれほど多くないが、唱歌に対して、心を向ける姿勢を持っていたことは十分に言えることである。大正初めに生れた作家の一例として、ここに述べておく。

三 生れ年一覽と教科書の普及との関係

本稿は平成八年度から十三年度まで六編（紀要三五―四〇）、同十四年度から十六年度まで三編（本誌三〇・三一・三三）を発表した。

この九編で取り上げた作家・評論家等は九十名で、その内、十三名が『現代短歌分類辞典』に拠った歌人である（大正時代の新見南吉は除く）。ところが、連載の形で執筆するたびに補遺が重なり、当初の予想以上に分量が増大していった。そこで作者名を生れ年の順にまとめ、一覧するのに便利ないように掲げる。また、生れ年により、即ち幼少年時代と教科書の発行・普及とが相関があるかどうかを次に確かめて、考察する。

○作者の生れ年一覧

〈凡例〉(1)明治以降、一年に複数名がある場合、本稿の執筆順に記す。(2)『現代短歌分類辞典』の歌人には括弧をつける。

天保12年 服部撫松。嘉永3年 小泉八雲、矢野龍溪。4年 伊沢修二。安政4年 大和田建樹。5年 植村正久。6年 坪内逍遙。文久4年 二葉亭四迷。慶応3年 石橋思案、尾崎紅葉、夏目漱石。

〈以下、明治。年号は略〉

4年 国木田独歩、徳田秋声、田山花袋。5年 樋口一葉、島崎藤村、小川未明。6年 与謝野鉄幹。7年 河合醉名。8年 柳田国男。9年 生田葵山、金子薫園、新村出。

10年 (窪田空穂)。11年 寺田寅彦。12年 山本露葉。16年 志賀直哉、(前田夕暮)、(山川柳子)、(熊谷武雄)。17年 長谷川伸。18年 中勘助、木下李太郎、(四賀光子)。19年 石川啄木、萩原朔太郎、島

木赤彦、藤村操、谷崎潤一郎。

20年 水上瀧太郎、山本有三。21年 加藤武雄。22年 室生犀星、内田百閒、(松村英一)、三木露風、和辻哲郎。23年 日夏耿之介、坪田譲治。25年 西条八十、千葉省三、渋沢秀雄。28年 森銃三、(中村美穂)、川上澄生。29年 宮沢賢治。

30年 (潮みどり)。31年 尾崎士郎、井伏鱒二。32年 川端康成、尾崎一雄、丸山薫、吉野せい、(筏井嘉一)。33年 石坂洋次郎、壺井栄。34年 梶井基次郎、(大熊長次郎)、岡潔。35年 富沢有為男、外村繁上林暁。36年 林芙美子、若杉慧、竹山道雄。37年 木山捷平、幸田文。38年 伊藤整、(片岡恒信)。39年 岩下俊作、(木俣修)。40年 中原中也、湯川秀樹、山本健吉、井上靖。41年 東山魁夷。42年 太宰治、大岡昇平。43年 (石川まき子)。

これを通覧すると、明治以前生れが十一名、明治元年から九年生れが十二名、以下、十年代が十六名、二十年代が十八名、三十年代が二十五名、四十年代が八名と、年を追って増加しており、ことに、三十年代が群を抜いていることが分る。これに、唱歌教育を本格的に受けた年代を仮に十歳とし、生れ年に十年を加えると、明治三、四十年代の小学校教育の影響を見て取ることができる。

では、唱歌の教科書の発行の様子はどうか。「二十二、三、四年頃から、各種の音楽教科書、および唱歌集が出版されるようになったが、二十五年頃を境にしてその数が急激に増加し、さらに軍歌がこれに加わったので、唱歌軍歌が入り乱れて無差別に歌われるようにな

り」と、その盛況ぶりを示している（『日本教科書大系・唱歌』）。確かに明治二十五年から十年間の発行点数は多く、この影響を受けて家庭や学校で充実した唱歌教育を受けた者が後に文学作品に取り入れることになったことも理解される。

かくして、明治四十年に小学校令の一部が改正され、唱歌がはっきりと必修科目として位置づけられることになる。同四十三年、文部省編集の『尋常小学読本』が発行され、『尋常小学読本』中の韻文に作曲したものが集められ、最初の「文部省唱歌」となった。続いて四十四年から大正三年までに『尋常小学唱歌』が国定教科書として発行され、唱歌教育が確立したのである。

四 唱歌の頻度数

唱歌を小説や随筆に取り入れる場合、唱歌一般について概括的に思いつきや意義を述べる場合と、個々の歌を歌ったり、回想し、意義を具体的に述べる場合の二つがある。ここで、後者について、作者がどの歌をどれくらい作品に描いているかを調べることにする。この方針として、次の原則を立てる。

- (1) 数に算入する唱歌は学校唱歌を中心に、旧制高校の寮歌、明治時代の軍歌を加え、いわゆる唱歌調の歌に限る。童謡、歌謡、昭和時代の軍歌は省略する。
- (2) 一人の作者が何度もその歌について述べていても一回とする。
- (3) 個々の歌について詳しく述べる一方、歌の題名だけを目録のように列挙している場合、後者は省略する。

このようにして見ていくと、取り上げた歌は一六二曲、そのうち三名以上の者が触れているものは四十二曲であった。これは全体の約四分の一であり、思ったほど一つの歌に集中しなかった。ということは、それぞれの作者がそれぞれの人生の中で個々の歌について体験し、抒情を駆き立てたということである。そして、その中で、共通の感覚で受け止める日本的な心情の歌が四分の一で、それが日本人としての感性の核を成してきたのではないかと思われる。では、次に三名以上の者が挙げた歌を年ごとにまとめ示す。明治年号は初めにだけ記し、歌の下の番号は人数である。

明治11年 風車(3)。13年 君が代(9)。15年 蝶々(4)、春のやよひ(3)、螢の光(16)。16年 霞か雲か(6)。17年 仰げば尊し(7)、才女(3)、寧楽の都(4)、庭の千草(4)。18年 抜刀隊の歌(3)。

20年 金剛石(5)。21年 紀元節(4)、孝女白菊の歌(4)、故郷の空(4)。22年 殖生の宿(7)。25年 元寇(4)、高い山(4)。

26年 天長節(4)、豊島の戦(3)、雪の進軍(5)。

30年 軍艦行進曲(6)。32年 桜井の訣別(8)。33年 キンタロウ(3)、鉄道唱歌(10)。34年 うさぎとかめ(8)、荒城の月(14)、箱根八里(3)。春爛漫の(4)。35年 ああ玉杯(5)。38年 美しき天然(3)、戦友(4)。39年 紅萌ゆる(3)。

42年 野なかの薔薇(3)、菩提樹(3)。43年 鎌倉(3)、水師營の会見(4)、われは海の子(3)、あなかの四季(3)。44年 かた

つむり(3)。

大正元年 広瀬中佐(4)。3年 朧月夜(3)。

これを通覧すると、内容の点では、国家、歴史・地理、自然・季節、故郷・学校と三つの分野に加え、軍歌、寮歌、童謡的な歌が含まれ、わが国民性の特徴がよく表れている。また、年代別にみると、明治十年代が十、二十年代が十、三十年代が十二、四十年代が七、大正時代が二と、満遍なく分布する。しかし、よく見ると、明治十年代は「小学唱歌集」(初・第二・第三編)が八曲もあり、この与える精神的感化の深さが改めて認識される。また、前述の通り、唱歌教科書の発行が増え、頂点に達した二十五年から十年間が十三曲で、三割を占めている。これを作者の生れ年が二、三十年代に特に多かったことを考え合せると、明治二十年代半ばから三十年代における唱歌教育の充実と発展の様相が見て取れるのである。

Nursery Rhymes and Contemporary Literature

— the third volume —

Isao WAKAI

Abstract

- nursery rhymes in school education
- relation between child and nursery rhymes
- nursery rhymes in the history of literature
- significance of nursery rhymes
- supplement of my former papers

Keywords: nursery rhyme, children's song, song, musical education, Japanese expression